

間接質問法によるタテマエの回避

-Google フォームを使ったアンケート調査-

2015/6/17

水曜日 2限 心理学演習 11D (卒論)

豊田秀樹

桜班

伊藤優花 松尾千夏

關根大亮 中島大幾 槇萌実

調査者

班名：桜班

班員：

4年生：伊藤優花 松尾千夏

3年生：關根大亮 中島大幾 槇萌実

目次

1	間接質問法による名前の付けたさの検討	3
1-1	はじめに	3
1-2	目的	4
1-3	方法	4
1-4	結果	4
1-5	考察	5
2	Aggregated Response 法を用いた GPA の調査	6
3	ランダム回答法を用いた代返経験の有無の調査	6

1 間接質問法による名前の付けたさの検討

1-1 はじめに

アンケート調査における質問項目の中には、社会的望ましさのバイアスが生じる可能性がある。社会的望ましさとは、調査の回答者が、彼らが信じているものに従うのではなく、社会的に最も受け入れられやすいものにしがって回答する傾向のことである。社会的望ましさの影響を受けると、自己を社会的に望ましくみせようとする圧力によりデータが歪んでしまう。直接的に名前を付ける際の観点の重要度を尋ねたとしても、社会的に望ましい態度をとる方が良いと判断されると、本音の回答を得ることは難しくなる。このような問題に対処するために、間接的に質問することで観点の重要度を算出するという間接質問法がある。まず、典型的な名前を 20～30 挙げて「読み方が意外」「意味が込められている」「伝統的だ」「よく聞く名前だ」の観点で名前を評定する。次に、「各名前の付けたさ」とその他の観点との一致度を計算する。「各名前の付けたさ」との一致度が高い観点ほど重要視していると解釈する。

本調査では子供の名前を付ける際の重要度を聞くこととした。観点は「読み方が意外だ」「意味が込められている」「伝統的だ」「よく聞く名前だ」である。

名前の流行は時代によって移り変わっていくものであるが、最近の名づけの流行として、「キラキラネーム」と「よくある名前」の二大潮流となっている見方もある。「キラキラネーム」とは、パッと見で読めないような当て字や、常識的に考えがたい名前を無理やり日本の漢字に当てはめた、一般的に「奇抜だ」とされる名前を指す（例：黄熊と書いて”ぶう”と読む、など）。またその一方で、SNS の普及により、あえて人気ランキング上位にあるような「よくある名前」をつけようという動きもある。これは、個人名でキーワード検索される機会が増えたことが背景にあり、本人が特定されないように個性的な名づけを避けるのだそうだ。

このような傾向から、最近の若者は読み方が意外な名前や、よく聞く名前を付けたいという本音があるのではないかと思われたため、桜班では「読み方が意外だ」及び「よく聞く名前だ」の 2 つの観点が本音ではないかと推察した。しかし、実際は「読み方が意外な名前を付けたいか」と直接的に聞かれると、キラキラネームを連想させ、嘲笑や偏見の対象にもなりかねないため、社会的に望ましい態度をとる方がよいと判断されるのではないかと考えられる。また、「よく聞く名前だ」という観点についても、ありきたりな名前をつけたいという風にも捉えられるため、本音の回答を得ることが難しくなると考えた。

次に、タテマエとしての観点が「意味が込められている」及び「伝統的だ」の 2 つである。意味を込めて名前を付ける、という行為は親として社会的にとるべき態度であり、タテマエとしてふさわしいのではないかと思われる。そして、伝統的な名前というのも、古くから人々に広く愛される名前だと考えられ、タテマエとして選びやすいと示唆される。

最後に、刺激は「読み方が意外だ」を典型的に表していると思われる大翔（たいが）、宙（そら）、愛（まな）、陽菜（ひなの）、桜（はる）を選択した。「意味が込められている」では漢字から意味が連想されるような名前である勇氣（ゆうき）、友美（ともみ）、大地（だいち）、健太（けんた）、良子（よしこ）を選択した。「伝統的だ」に関しては古くからよく使われている名前である花子（はなこ）、太郎（たろう）、君恵（きみえ）、龍之介（りゅうのすけ）、小百合（さゆり）を選択した。「よく聞く名前だ」では桜班員の周りでよくみられた名前の翼（つばさ）、拓也（たくや）、舞（まい）、友梨子（ゆりこ）、航平（こうへい）を選択した。

1-2 目的

本調査の目的は、間接質問法を用いて、名づけをする際に選ぶ観点の重要度を分析することである。

1-3 方法

調査参加者 大学生 112 人が調査参加者であった。

材料 Google フォームを用いて調査票を作成した。

調査手続き Google フォームを用いて調査票を作成し、調査を実施した。項目数は 104 項目であった。

1-4 結果

重視する観点の平均値が①読み方が意外 1.5、②意味が込められている 4.7、③伝統的だ 2.6、④良く聞く名前だ 2.4 であり、大きさ順に並べ替えると①<④<③<②のようになった。

次に、各名前の付けたさと①～④の観点の度合いとの相関を調べると、①読み方が意外 -0.36、②意味が込められている 0.33、③伝統的だ -0.1、④よく聞く名前だ 0.71、となった。絶対値の大きさ順に並べ替えると③<②<①<④のようになった。

各観点は独立しているのかについて分析すると、①と③、①と④のあいだで -0.83、-0.82 という強い負の相関がみられた。

また、男女間での評価の差を t 検定で検証した。まず 1 つ目の質問の観点についてはいずれも有意な差は出なかった。3 つ目の質問の名前別の付けたさの差に関しては翼（つばさ）、良子（よしこ）、宙（そら）、友美（ともみ）、太郎（たろう）、君恵（きみえ）、花子（はなこ）、桜（はる）で有意な差が出た。翼（つばさ）は女性が 3.80 で男性が 3.35 であり、女性の方が有意に高かった。良子（よしこ）は女性が 1.90 で男性が 2.44 であり、男性の方が

有意に高かった。宙（そら）は女性が 2.74 で男性が 2.28 であり、女性の方が有意に高かった。友美（ともみ）は女性が 2.77 で男性が 3.19 であり、男性の方が有意に高かった。太郎（たろう）は女性が 1.71 で男性が 2.33 であり、男性の方が有意に高かった。君恵（きみえ）は女性が 1.91 で男性が 2.42 であり、男性の方が有意に高かった。花子（はなこ）は女性が 1.45 で男性が 1.77 であり、男性の方が有意に高かった。桜（はる）は女性が 2.16 で男性が 2.05 であり、女性の方が有意に高かった。全体的に、評価者が女性の場合は男の子の名前を高く評価し、評価者が男性の場合は女の子の名前を高く評価する傾向が見られた。

1-5 考察

重視する観点については、建前として「意味が込められている」名前を付けたいということが示唆される。意味を込めて名前を付ける、という行為は親として社会的にとるべき態度であり、「意味が込められている」はタテマエの観点として適当なものだったと思われる。

名前の付けたさと①～④の観点の度合いとの相関をしてみると、④良く聞く名前だが 0.71 と最も大きい値となった。このことから、本音としては「よく聞く名前」を付けたいということが考えられる。今回の回答者は全体的にキラキラネームを付けることは避けたいと思う人が多かったと考えられるだろう。

各観点は独立しているのか分析してみると、①読み方が意外と③伝統的だの間で-0.83、①読み方が意外と④よく聞く名前だの間で-0.82 という強い負の相関がみられた。桜班では「読み方が意外」という観点到奇抜なキラキラネームのニュアンス、「伝統的だ」には古風な名前のニュアンス、「よく聞く名前」には一般的によく好まれる名前のニュアンスを込めていた。キラキラネームと伝統的な名前、および、キラキラネームとよく聞く名前は互いに相反するものであり、強い負の相関がみられるのは当然のことだといえる。したがって、観点①、③、④は独立しておらず、連動する結果となってしまった。

男女間での評価の差を t 検定で検証した。その結果、3 つ目の質問の名前別のつけたさの差に関して翼（つばさ）、良子（よしこ）、宙（そら）、友美（ともみ）、太郎（たろう）、君恵（きみえ）、花子（はなこ）、桜（はる）で有意な差が出た。更に、全体的に評価者が女性の場合は男の子の名前を高く評価し、評価者が男性の場合は女の子の名前を高く評価する傾向が見られた。これを推察すると、異性の名前の方が好まれやすいと考えられる。ここから、女性は息子を、男性は娘を望んでいる可能性も示唆されるのではないだろうか。

2 Aggregated Response 法を用いた GPA の調査

問 2 では, Aggregated Response 法を利用して, 回答者の「去年(2014 年度)の後期の GPA」の平均値を算出した。Aggregated Response 法は調査で知りたい項目が連続的な値を取る場合に利用される調査手法である。この手法では回答に対して確率的操作が入るため, ききにくい数値をたずねるのに有効であると考えられる。

今回の調査で明らかにしたい項目は, 回答者の「去年の後期の GPA」である。一般に, 人は自分の能力の良し悪しを他者に知られてしまうことを避けたがる傾向がある。そして成績表というものは, 学業における能力を数値で表現したものと解釈することができる。また, GPA は大学生の学業成績を 0 から 4 までの数値で評価した成績表である。それゆえに, 大学生にとって「去年の GPA」は率直に回答したくない質問であると考えた。なお結果の算出に当たっては大学 2 年生以上の回答者の値を利用した。方法は間接質問の同様に Google フォームを用いて行った。

結果の算出の概要を以下に示す。まず回答者にコイン投げをしてもらい, 表が出た集団と裏が出た集団にわけた。コイン投げで裏か表の出る確率はそれぞれ 0.5 であることが知られているため 2 つの集団は等質な集団とみなすことができる。次に, 回答者の去年の後期 GPA に 100 をかけたものを x , 回答者の郵便番号の上 3 桁を y として x, y を求めるよう指示した。さらに, コイン投げで表が出た集団には $x+y$ を, 裏が出た集団には $x-y$ を求めてもらった。GPA に 100 をかけたのは計算の便宜のためである。また, 郵便番号の上 3 桁の平均は 2 つの集団間で同じであると仮定している。無記名回答者の郵便番号から個人を特定することは不可能である為, 回答者の GPA 自体の推測も不可能である。回答の期待値は x の期待値と等しいことが数学的に証明できるため, 回答の平均値はそのまま x の平均値として解釈できる。したがって, 回答の平均値を 100 で割った数値が, 回答者の去年の後期 GPA の平均値であると解釈できる。

結果は, 回答者の去年(2014 年度)の後期の GPA の平均値は 2.89 であることが明らかになった。このように, GPA のようにあまり他人に知られたくない質問項目に関しても, Aggregated Response 法を用いてその平均値を計算可能であることが示唆された。

3 ランダム回答法を用いた代返経験の有無の調査

4 問目ではランダム回答法を用いて嘘や建前をさけ, 友人に自分の代わりに出席をとってもらったことがある(この行為を以下, 代返と呼ぶ)大学生がどれほどいるか調査する。ランダム回答法とは回答する質問文をランダムに決定すること方法である。これにより正

直に回答する人の割合が増加することが期待できる。今回の代返のような正直にこたえづらいう質問に利用される。

代返は、当然社会的に望ましい行為ではなく、教授によっては単位を与えないなどの厳しい対処を施す場合もある。したがって質問をされた側はたとえ実際にこの行為を行っていても、「やったことがない」と回答をする可能性が危惧される。そこで、回答者の男女比は1対1であるという仮定のもと、「あなたは男性ですか」という質問とセットで用いる。

回答前にコインを投げてもらい、表が出たら質問1「友人に自分の代わりに出席をとってもらったことがありますか。」に回答してもらい、裏が出たら質問2「あなたは男性ですか。」に回答してもらおう。コインの裏表が出る確率も1対1であるから、どちらの質問にも回答者の半数が回答したと仮定する。これらの仮定の下で実際に「はい」と答えた回答者の割合を2倍した値から0.5を引くことで、代返をしたことがある人の本来の比率が求められることがわかっている。

大学生を対象に121人に調査した結果、「はい」と答えた回答者の割合は0.38であった。この値から本来の代返経験者の割合は0.26と求められた。すなわち、大学生の約2〜3割が代返をしたことがあると考えられる。